

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(8) 平成12年9月1日

伊豆国の地誌(その4)

伊豆海島風土記(S291.1/1)

伊豆国に関する地誌には、現在は東京都に属している伊豆諸島に関するものが多くあります。本紙5号で紹介した秋山富南(章)も、「豆州志稿」よりも早く、1791(寛政3)年に「伊豆七島志」を著しています。

伊豆諸島とは、大島・利島・新島・式根島・神津島・三宅島・御蔵島・八丈島・青ヶ島などの、ほぼ南北に連なる島々のことで、このうち式根島・青ヶ島を除く島々をとくに伊豆七島と呼んでいます。伊豆諸島は古くから流人の地と定められ、江戸時代にも関ヶ原の戦いで西軍に与して敗れ、八丈島でその生涯を終えた宇喜多秀家をはじめ、多くの罪人が島々に送られました。明治以前は伊豆国に付属し、幕府直轄領として葦山代官が支配していました。

「伊豆海島風土記」は、八丈島、八丈小島、青ヶ島、大島、三宅島、新島、式根島、神津島、御蔵島、利島の風土・歴史・民俗等を記したものです。式根島を除く9島は彩色の島絵図が各島の冒頭に描かれています。

記載の内容は、たとえば八丈島については、下田湊より巳の方角(南南東)海上64里(約256キロメートル)江戸からは午(南)の方角に海上120里の位置にあり、東西3里、南北7里余の島で、海岸は険しく、船をつけることも容易ではないと記しています。また、島の男性は髪に元結油を用いるが、女性は元結油も紅白粉も使わず、かんざしもささず、ただ髪をすきあげて頭の上で束ねていると紹介しています。そのほか島の生業・食事や慣習についても細かく記されています。ただ、島の人々の気質を、「寡黙で気力がなく、家業も怠りがちで、教えられたことを一度では覚えられない」と記すなど、著者の離島に暮らす人々への蔑視を否めない部分もあるようです。

また、伊豆諸島は富士火山帯に属しているのも、本書にも噴火に関する記述が見られます。三宅島の項にも「この島も山焼あり」とあり、続けて1711(正徳元)年、1763(宝暦13)年、1769(明和6)年の噴火を紹介しています。また、大島にも山焼の記事が見え、1684(貞享元)年から1690(元禄3)年まで噴火、1777(安永6)年から翌年にかけても噴火があり、その間昼夜地震があるため野山での仕事ができず、また魚が島に寄りつかないために漁にでることもできず、島の人々は大変困ったようです。しかし、島ではこれを御神火とよんで崇めているとも記しています。その理由について著者は、「溶岩が海岸に流れ込めばやがてそこには草木が生え、田畑にすることもでき、島の面積も広くなるのであるからであろう」と推測しています。

本館所蔵本には序文もあとがきもなく、成立年代も著者もわかりません。ただ、1929(昭和4)年に東海文庫として刊行された「伊豆海島風土記・伊豆めぐり」(S080.3/2)の足立鋤太郎氏の解説では、本書は幕僚の佐藤行信が1781(天明元)年に吉川秀道に伊豆諸島を調査させた結果をもとに書き上げたものとしています。また、足立氏は、本書は6巻からなるとされていますが、今回紹介した本館所蔵本はその第1・2巻部分だけです。なお当館は、「伊豆風俗志」(Q382/1)として「伊豆海島風土記」6巻分の別写本を所蔵していますが、それには前述の9枚の伊豆諸島絵図は付載していません。